

五味オーディオ

巡礼

- (3) 山中敬三氏
- (4) 菅野冲彦氏
- (5) 瀬川冬樹氏



五味オーデイオ巡礼

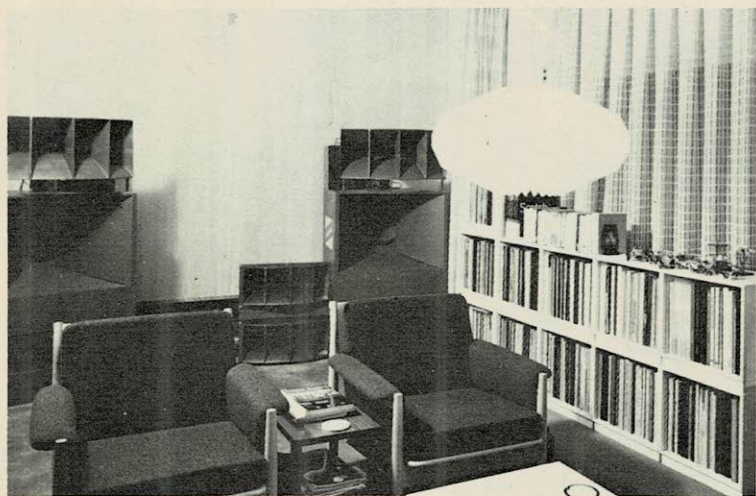
オーデイオ評論家の音

五味康祐

今回は編集部の希望で、本誌の有能な執筆陣——オーデイオ機器への該博な知識をもつ・気鋭の——時に啓蒙的な——三氏の音を聴いた。

本誌の執筆者だから褒めねばならぬ義理合いは私にはない。そういう文章を私は書けない。つまらぬ音ならそう言うし、オーデイオ誌上で、もっともらしい御説を述べる当人がこんな悪い音を平気で聴いているのか、もうそう思えばその通り言うつもりでいる。(事実そういう録音批評家を私は知っている)ただ、大事なことなので言っておきたいが、私が聴きたいのは要するに音楽であつて、音ではない。前回でも述べたように人それぞれ別の教養や性格がその人の生活の場でつくり出し、鳴らす音楽を、私は聴きたい。同じアンプ、同じスピーカーを使用してもその機械できこえてくる

音楽は、各人ちがう。オーケストラを好んで鳴らす人もあればジャズを聴く人もいる。ピアノ曲を好んで掛ける人もいるだろう。そしてこれは、若い読者には是非知っておいてほしいが、誰かの家でレコードを聴いていて、もしそのレコードを自分も手に入れたいと思うなら、それは素晴らしい音で鳴っているからだ。聴いているあなたにすばらしい音楽なのである。同じレコードを入手して自分の家で掛けてみたら、案外、つまらなんだという経験はレコードを聴いた人なら持っているが、いい音のレコードがつまらない音楽にしか聴こえない苦の時、はじめて、人は自分の再生装置への疑問をもつ、そうして本誌のようなオーデイオ誌を熟読しはじめる。しかし、違ふのは彼とあなたの装置ではなく、彼とあなたの音楽的教養の差だと思



山中氏のリビングルーム

わねばならぬ。人生体験の違いによると先ず思っ
てかかった方が間違いないだろう。

同様に、当人はいつもりで掛けてくれている
のに、聴く方にはサッパリおもしろくないレコー
ドがあれば、音や耳が悪いのではなく掛けてくれ
る人の教養・人生のつまらなさによると思ってい
い。そういう意味で、一枚のレコードだって人に
聴かせるのはコワイものである。

今回の三氏は、そういうコワさを知っている人
たちだと私は思っている。だから聴きにいった。

巡礼3——山中敬三氏

はじめに山中敬三さんを訪ねた。元来私は人み
しりする方だが、拙宅のEMTのプレイヤーをこの
数日前、山中氏に組立ててもらったあと、一諸に
赤坂のナイトクラブで飲んだ。午前三時すぎに別
れたように思うが、こちらは相当酩酊していたか
らもつと晩かつたかも知れない。酒の上のつき合
いは、それがこころよい時間ですごせた時オーテ
イオのそれとは又別個な、親しみの感情が湧いて
くる。私の場合そうである。

そんなことで、この巡礼で初対面の人みしりは
私の方にはもうなかった。安心して私は山中氏の
鳴らしてくれる音楽を聴いた。

装置はアルテックA5エンクロージャ。(EM
T930St、マッキントッシュMC275)で、
私のこれまで知っているA7の音色の限界を越え

これは、どんな装置でどんな音が鳴っているかよ
り、はるかに大事なことだ。

三氏とは、これまで編集室で一、二度顔を合わ
せ、気持のいい人たちだと私のほうで勝手に好意
をよせていたが親しく話をしたことはない。その
好みの音がどういふものか、言葉の上で語り合っ
たこともない。三氏の装置のことは、本誌などに
散見してあらましを知っているが、どんなレコー
ドを(つまり音楽を)聴かせてもらえるかは訪問
するまで分りようはなかった。

華々しきで鳴った。これには驚いた。むろん本
質的にそれがアルテックの音であることにかわり
はない。こう言っているなら劇場用の音である。
多勢に聴かせる音である。夜更けて独り、挫折感
や悔いや生き難さへの悩み、愛に酬われぬ痛哭、
そんなものを癒やされ明日への己れを鼓舞してく
れる曲を聴くにふさわしい音ではないと私には思
えた。そういう意味で、山中氏は世の常の人から
は恵まれた環境にあつたのだらうとおもう。彼の
部屋で鳴っている音がそう言っている。

人に聴かせられる音なのである。
もつとも、だからといって山中氏は劇場ふうな
音楽は鳴らさなかった。かえって哀愁のある四重
唱をきかせてくれた。次に鳴ってきたレコードも
ピアノを伴う独唱だった。ここに山中氏の謙虚な



人柄が出ているように思う。但しアルテックの真価を發揮するには、これは不十分なレコードといわねばならぬ。そこで私はマーラーの交響曲を聴かせてほしいといった。挫折感や痛哭を劇場向けにアレンジすればどうなるのか、そんな意味でも聴いてみたかったのである。シヨルテイの「五番」だった所為もあるが、私の知っているマーラーのあの厭世感、仏教的諦念はつきこえてはこなかった。はじめから「復活」している音楽になっていた。そのかわり、同じスケールの巨きさでもオイゲン・ヨッフムの棒によるブルックナーは私の聴いたブルックナーの交響曲での圧巻だった。ブルックナーは芳醇な美酒であるが時々、水がまじっている。その水つ気をこれほど見事に酒にしまった響きを私は他に知らない。拙宅のオーグラーフではこうはいかない。水は水つ気のまま出てくる。さすがはアルテックである。

別に、意地わるいようだがベートーヴェンの弦

巡礼4 — 菅野沖彦氏

菅野さんの場合、装置に要求されているのは私などとはまったく異質のクオリティである。

菅野沖彦氏は、雑誌の座談会で一度会っているが、それとは別に、この人のことを私なりに知っていた。

文壇へ出た頃からつき合っている編集者で、菅野氏の妹と結婚した男がいる。彼は拙宅にあった

楽四重奏曲（作品一三二）を掛けてもらった。ブラベスタの演奏だから録音は相当古いが、その所為ではなくてずいぶん大味な一三二にきこえた。これはリヒターによるアルヒーウの4トラ・テープ、口短調ミサの場合も同様である。明らかに、たった一人で聴くための音ではない。

私は辞去するとき山中さんに言ったのだ。あなたにはもっと広いリスニング・ルームを造ってあげたいなあと。心から私はそう言った。山中氏の部屋にはむかし咽喉から手の出るほど私のほしかったアンベックス三〇〇がある。EMTで聴くときもそうだが、むしろEMTの場合以上に、アンベックス三〇〇を駆動した2トラ倍速のプレイバックはアルテックの真価を發揮するにちがいない。そのためにも今の部屋は狭すぎるようなので、大きな部屋をと言ったのである。不幸でもない人に、不幸になって味わえる性質の音楽や音質などですめることはないのだから。

テレフンケン・オッパスとそのテレコを分捕るように持って行き、いまだに愛聴しているが、新婚家庭へ遊びに行ったら、聴きなれぬテープを聴かせてくれた。なかなかいい音だと褒めたら弟の録音だと聞いた。彼は自分の方が年長なので「オキヒコは弟だ」と私には言ったのである。それで奥さんの弟ならまだ学生だろうぐらいに思い、家庭



菅野氏のリスニングルーム

で採った音ながらこんなにもうまい録音をするなら弟を録音家にしたらどうだと冗談にすすめた。今の菅野氏は、さしづめ「冗談から出た駒」ということになる。優秀な駒である。ジャズ界に於ける菅野氏の録音家としての力価は、まことに注目すべきもので、専門外の私の耳にまでその秀抜な音の捉え方、ムービングへの周到な配慮をたたえる声がかかれていた。しかし何ぶんにも「オキヒコは弟です」という男の方を私は知りすぎている。シベリウスの交響曲第七番を聴かせていたらグウグウ居眠りして、レコードがおわったところでハッと目をさまし、「ふム。シブい曲だねえ」……こんなご愛嬌な男の弟に音楽を語る機会があらうとは私には思えなかった。編集者としての彼は第一級の人間だし、仕事以外の面でもずいぶん私は厄介をかけている、その彼の弟なのだから何とか大成してほしいといった、あくまで彼を通じた結びつきを心の中で私は持っていたにすぎない。

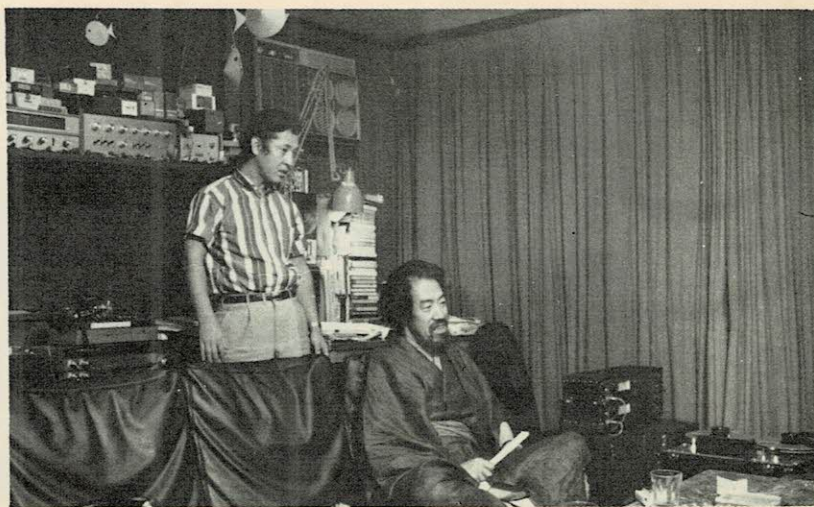
実際はだが、沖彦クンの方が兄だったのである。菅野家を訪ねて初めてその音をきいて、私は菅野氏が凡庸の録音家でないのを知った。彼のような録音プロデューサーは家庭でどんな音の鳴らせ方をしているかを知った。

菅野氏のスピーカー・システムはトワイターがジムランの075、スクーカーは375に537—500ホーンをつけ、それに「目下のところこれがどうにか満足できる音なので」ウーファーにはバイオニアのPWA38を収めてあった。

だがこうした詳細は菅野氏の場合大して意味がない。一言でいうと、其処で鳴っているのはモニ

ターの鋭敏な聴覚がたえず検討しつづける音であって、音楽ではない。音楽の情緒をむしろ拒否した、楽器の明確な響き、バランス、調和といったものだけを徹視的に聴きわける、そういう態度に適合する音である。むろん、各楽器が明確な音色で、バランスよく、ハーモニーを醸すなら当然そこに音楽的情緒とよぶべきものはうまれるはずと人は言うだろう。だが理屈はそうでも聴いている私の耳には、各楽器はそのエッセンスだけを鳴らして音楽をひびかせようとはしていない、そんなふういきこえる。たとえて言えば、ステージがないのである。演奏会へ行つたときわれわれはステージに並ぶ各楽器のひびかせる音を聴くので、その音は当然、会場のムードの中できこえてくる。いい演奏者ほど、音そのもののほかに独特のムードを聴かせる。それが演奏である。ところがモニターは、楽器が鳴れば当然演奏者のキャラクターはその音にじんできているという、まことに理論的には正しい立場で音を捉えるばかりだ。——結果、演奏者の肉体は消え、楽器そのものが勝手に音を出すような面妖な印象をばくらに与えかねない。つまりメロディはきこえてくるのにステージがない。

電気で音をとらえ、再び電気を音にして鳴らすなら、厳密には肉体の介在する余地はない。ステージが消えて当然である。しかしそういう電気エネルギーを、コーンの振動で音にして聴き馴れたわれわれは、音に肉体の復活を錯覚できる。少なくともステージ上の演奏者を虚像としてではなく、実像として想像できる。これがレコードで音楽を



聴くという行為である。かんたんというなら、そして会場の雰囲気や音そのものと同時に再現しやすい装置ほど、それはいい再生装置といえることができる。

レコード音楽を家庭で聴くとき、音の歪ひずまない再生を追求するあまり、しばしば無機的な音しかきこえないのはこの肉体を忘れるからなので、少なくとも私は、そういうステージを持たぬ音をいとは思わない。そしておもしろいことに、肉体が消えてゆくほど装置そのものはハイ・ファイ的に、つまりいい装置のように思えてくる。

この危険な倒錯を、どこでいい止めるかで音楽愛好家と音キチの区別はつくど私は思ってきた。以前からジムランのトーンクオリティを私が却

巡礼5——瀬川冬樹氏

瀬川冬樹さんの場合も、本誌などの文章からジムラン愛用者の印象を私はいくけていた。前の両氏とちがって、会うのもこの「巡礼」がはじめてだったが、その部屋に落着いたとき、オヤと思っただいたい部屋に入って、そのたまたまを見せてもらっただけで、実際に音は鳴り出さずともどういう傾向の人か、およその見当はつく。これは不思議である。軽薄な感じ、キザな感じ、「ええカッコしい」すべて人柄はその鳴り出す音と共通だから、いやなやつのところを音を聴かせてもらおうとは私は絶対おもわない。こちらの先入観が、

たのはこの理由からである。ジムランが肉体を聴かせてくれたためにはない。むしろ、人それぞれに好みがあり、耳くせがあり、なまじ肉体の臭みのない、純粋な音だけを聴きたいと望む人がいて不思議はない。そしてそういう、純粋に音だけと取組まねばならぬ職業の一人が録音家である。この意味で菅野さんがジムランを聴くのは当然で、むしろ賢明だと思う。

しかしあくまでわれわれシロウトは音ではなく音楽を聴くことを望むし、挫折感の慰藉であれ愛の喪失・もしくはその詠歌であれ憎悪であれ、神への志向であれ、とにかく、人生にかかわるところで音楽を聴く人には、無機的なジムランを私は推称しない。むしろこれは私個人の見解である。

音を聴いて改めさせられたためにはないからである。どんな装置にせよ、ヒヤカシ気分で音をききに行くことを自他ともに私は憎む。これは言っておきたい、この「巡礼」もふくめて、私とその人も訪問するのは先方への私なりな好感やら親しみ、畏敬の念、未知の人ならその装置への期待をいっているからである。虫の好かぬ相手がどんな立派な装置をもつていようとこちらの知ったことではない。

瀬川氏へも、その文章などでだから私は大へん好意を寄せていた。ジムランを私は採らないだけ



瀬川氏のリスニングルーム

に、瀬川君ならどんなふうにも鳴らすのかと余計興味をもったのである。その部屋に招じられて、だが、オヤと思った。一言でいうと、ジムランを聴く人のたまたまではなかった。どちらかといえばむしろ私と共通な音楽の聴き方をしている人の住居である。部屋そのものは六畳で、狭い。私も

むかし同じようにせまい部屋で、生活をきりつめ音楽を聴いたことがあった。今の私は経済的にめぐまれているが、貧富は音楽の鑑賞とは無関係だ。むかしの貧困時代に、どんなに沁みて私は音楽を聴いたろう。思いつくかも知れないが、そういう私の若い日を瀬川氏の部屋に見出したような気がした。貧乏人はジムランを聴くなどというのではない。そんなアホウなことは言っていない。あくまで音楽の聴き方の上で、ジムランでは出せぬ音色というものがあり、たとえて言えば、フリュートはフランス人でなければ吹けぬ音色があり、弦ではユタヤ人でないとどうしてもひき出せぬひびきがある、そういう意味でカルフォルニア製のJ・B・ランシングには、絶対、ひびかぬ音色がある。クラシックを聴くジムランを私にはそれが不満である。愛用する瀬川さんはだから、ジャズを好んで聴く人かと思っていた。

ところが違った。彼のコレクションを一瞥すればわかる、彼はクラシックを聴いている。むかしの小生のように。アンベックスのAG-440などという一般愛好家にはうらやましいデッキがあり、EMTのカートリッジがごろごろし、マランツ7とジムランのエナジヤイザーが併用で置かれ

ているが、聴かれるべきレコードの傾向は、本質的にクラシックだ。

ボベスコのヴァイオリンでヘンデルのソナタを私は聴いた。モーツアルトの三番と五番のヴァイオリン協奏曲を聴いた。そしておよそジムラン的でない鳴らせ方を瀬川氏がするのに驚いた。ジムラン的でないとは、奇妙な言い方だが、要するにモノラル時代の音色を、更にさかのぼってSPで聴きなじんだ音（というより音楽）を、最新のスピーカーとアンプで彼は引き出すと努めている。抱きしめてあげたいほどその努力は見えていない。およそオーディオ誌で吹聴されるジムランシングのあの、乾燥した派手さのない音をつくらうと。

ぼくらは、身銭を切って買った装置を何とか皆良く鳴らそうと努める。その装置につまり自分の血をかよわせる。経済的にも、かたんに買い替えるわけにはゆかないのだから、この努力には文字通りぼくらの血がかかるのである。それだけに、ついに満足に鳴らぬときの憂鬱は、音を愛する人なら知っているだろう。

瀬川さんに私は言ったのだが、ジムランは、それほど努力をしてもボベスコを男性ヴァイオリニストにしまっている。やっぱり、どうしてもジムランでは鳴らしきらぬクオリティの部分にこそ、ボベスコの真価はあるように思うと。

でも、私はこの訪問でいよいよ瀬川氏が好きになった。この人をオーディオ界で育てねばならないと思った。日本のオーディオを彼なら毒する方向へはもってゆかないだろう。貴重な人材の一人





だろう。

瀬川さんだけに限らない、山中氏がカートリッジ、プレーヤーに関して持つ造詣の深さはオーディオ界にとってもじつに貴重である。菅野君の録音における技術は信頼に足るものだ。もう一人、今回は予定できなかった岡俊雄氏のレコード音楽全

般に関する勉強ぶりを、以前から私は高く評価している。本誌に限らない、こういう有能な人たちが発表の機会をより多くもつことが、とりもなおさずオーディオ界の啓蒙と発展につながることを、あらためて私は痛感した。この意味でも今回の巡礼は有意義だった。